

ソークラテースにおける内的予言の構造について

——『パイドロス』242^b8—^d2を手掛かりにして——

一色 裕

一 本論の目的

我々はプラトーン対話篇中に唯一の、対話の最中にソークラテースに事件として臨んだダイモーンのお告げの直接描写 (Phdr. 242^b8—^d2) を解読し、その註釈的研究を試みることに¹よって、プラトーンが記した対話篇中のソークラテースにおける内的予言、更には哲学的靈感の構造を考察したい。

本論に入る前に我々は『パイドロス』篇の骨格を示し、以て我々が註解を試みる部分の全体における位置づけを確かめておきたい。『パイドロス』篇の全体は前半と後半の二部に分かれ、前半ではエロースを主題とした演説の実演が三篇披露され、後半ではかかる言語による認識と伝達に関わるメタ言語的なロゴス論が展開される。第一部の演説では、先ずソークラテースの友パイドロスによる弁論家リュシアスの演説の紹介、次いでソークラテースの第一の演説、そして間にソークラテースとパイドロスの軽い問答を間奏曲として挟んだ上で最後にソークラテースの第二の演説が披露される。

我々が今回注目するのは、第一部のエロース論の間奏曲にあたる部分で起った事件である。ソークラテースが第一の演説を語り終え、その場を立ち去ってイリソス川を渡ろうとした際にダイモーンが介入することによって

起った事件を問題にしたい。次に当該箇所⁽²⁾の翻訳を掲げる。

II *Phdr.* 242b8-d2 の翻訳⁽²⁾

「ぼくがまさに川をわたって向うへ行こうとしていた時にね、君、ダイモーン⁽³⁾、即ち、いつもよくぼくをおとされる例の合図が、あらわれたのだ。——それはいつでも、何かしようとする時にぼくをひきとめるのだが——そして、そこからある聲が聞えて、ぼくが神に対して何か罪を犯しているから⁽⁴⁾、自らその罪を清めるまでは、ここをたちさることはならぬと、こうぼくに命じたように思えた。ところでぼくは巫者なのだ。あまり有能ではないがね。しかしちょうど字の下手な人たちと同じで、ただ自分だけのためなら、けっこう間に合うのだ。だから、ぼくはもう、どんな罪を犯したのかはつきりわかっている。じっさい、友よ、およそ魂というものは、一種の予言の力をもっているのだ。げんにぼくは、あの話を語りながらも、ずっと前から、なんとなく胸さわぎがしていた。イビュコス⁽⁵⁾の言葉を借りて言う、『われ神々の前に罪人となりて、人の世の誉れを購いたるにあらざる』と、なにかしら気が気ではなかった。いまではそれがどんな罪か、すっかり気がついていけるけれども。」

我々が今翻訳した部分は内容的には次の三点に分節要約できるだろう。

(一) ダイモーンの合図がソークラテースに臨んだ際に神が与えた否定命令の内容と、ソークラテースによるその命令の解釈。

(二) ソークラテースによる自己が特異な巫者であることの表明と、その表明の魂一般への拡大。

(三) ダイモーンの合図がソークラテースに臨む前の、超越者が彼の魂へ加えた干渉と、未決の事態を前にした魂の動揺。

以上の三つの事柄が、直前に起きた事件の現在における反省の形で物語られている。ソークラテースはここで、直前に事件として臨み現在の自分に罪の自覚をもたらしたダイモンのお告げの臨在から、かかる神意の介入を招いた自己の過去の行為へと回顧的に視線を動かしている。しかし、対話篇中で特定の相手と機会をとらえて弁論家のように自由に語るソークラテースの言葉からことの由を尋ね、内的予言を成立させる諸契機を再構成するために、我々は対話の進行を過去から現在へと逆の方位を辿らねばならない。

三 内的予言の構成契機について

a タイモンの性格の一般的規定

我々は内的予言を構成する諸契機の検討に直ちに入っている前に、ソークラテースに靈感を注ぎ込んだダイモンの性格について一瞥しておかなければならない。一言でいえば、ダイモンはソークラテースにとって、彼の生を見守り思索と行動を規制する守護霊である。沈黙のうちに、ソークラテースの問答の方向を規制し、最も根源的な次元において相手に何をいかに問うべきかを教え、場合によって、ソークラテースの行為を禁止し、或いは命じ、或いは裁可する、神ではないが或る神のかつ靈的な存在である⁽⁶⁾。『ソークラテースの弁明』の *locus classicus* において、ソークラテースは自ら次のように語っている。「諸君も私からたびたびその話を聞かれましたが、私には、何か神からの報せとか、ダイモンの合図とかいったようなものが、よく起こるので……これは私には、子供のときから始まったもので、ひとつの聲となつてあらわれ、それがあらわれる時は、いつでも、私がかかしようとしている時に、それを私にさし止めるのでして、何かを為せとすすめることは、いかなる場合にも決してないのです。」⁽⁶⁾

ダイモーンは当の人間の行為を裁可している限りはお告げを下さない。ダイモーンがお告げを下すにあたっては、相当する然るべき理由がある。従って我々は、ダイモーンがお告げを下すまで見守っていたソークラテースの当の行為、具体的にはパイドロスに促されて語った第一の演説の語りの性格を次に考察しなければならぬ。

b ソークラテースの第一の演説の位置づけ

ソークラテースは何故第一の演説をパイドロスに語って聞かせたのか。それは非学問的弁論術のレベルでロゴスに心を寄せ、それにうつつをぬかしているものの、フィロソフィア（神的知慧の愛求）には背を向けている。パイドロスをフィロソフィアへ回心させる第一の布石をうつつためである。対話篇においてソークラテースは常に魂の教育者として姿を現わす。パイドロスの魂は、ソークラテースが彼に出会った時どのような状態にあったか。それを知るためには、当のパイドロスの関心を惹いている事象をみればよい。彼は弁論家リュシアスの作った一風変わった演説に入れあげて、それを暗誦することに躍起となっている。そのリュシアスの作った演説とはいかなるものであったか、それはエロースについて語るにあたって、戀は病める欲望であるという前提の上に、戀する人間に皮肉っぽい冷やかな視線を向けつつ、戀にとらわれていない人に身を捧げることが勧める逆説的な内容をもつ一方で、しかし、語られている当の事柄には本来関心がないことを反映するかの如き、単調で繰り返しの多い切り貼り細工の構成をなす、ソークラテースの見るところエロースについて語るにふさわしい内容も構成もたない演説であった。パイドロスは、かかるリュシアスの演説の言葉の量的な豊かさがそのまま質の高さを保證すると想定し、言論の価値について量と質の同一視を行なっている。「ソークラテース、そういう言い方はやめて友情の神ゼウスに誓ってほんとうのお気持ちを教えて下さい。ギリシア人で誰か彼以外の人が、同じ主題について、これよりももっと豊かでもっとたくさんのかたを別に話すことができると思われませんか。」このようにロゴスがロゴスとして語り明している存在に対してパイドロスの視線は閉じられており、彼は逆

説的な言葉の反復というロゴスの表層で戯れている。彼はロゴスが知識を明かすものとして人の存在の内から外へと発するものではなく、物品の如く水平的に賣買伝達されるかのように考えてより巧みな演説の競争に熱中し、ソークラテースにもそれを求めて止まない。一括すれば、パイドロスはこの時点では、ソフィステース流の非技術的非学問的弁論術のレベルに應ずるロゴス観の持ち主として描かれている。

かかる知識と断絶したロゴス観の持ち主に、リュシアスの演説の価値の善し悪しを根拠をもって判断することは不可能である。そこでソークラテースはリュシアスの演説の全面否定をパイドロスに公言し、自らのエロース観を開陳する道へ直接進むことは留保し、パイドロスをフィロソフィアに覚醒させるための方法的迂路をとる。ソークラテースはパイドロスに対するかかる配慮を以のように語る。「君という男は世にも愛すべき、それこそ金無垢のような人間だね、パイドロス。もしばくの言葉を、リュシアスの話が一から十まで失敗作で、ひいてはその内容と何ひとつ共通するところのないほかの話をするともできるなんて、そんな意味にとっているならばだよ。思うにそんなことは、最も凡庸な作家を相手にしてさえ、できない相談だろう。はやい話が、彼の話の主題のことを考えてみても、戀している者よりもむしろ戀していない者に身をまかせるべきだということを論じようというのに、戀していない者の思慮ぶかさを讃え、戀している者の愚かさを非難するというこのどうしても必要不可欠なことをもし言わなかったら、その上で何かほかの事柄を言うことが誰にできると思うかね。いや、そういうどうしても必要な議論はこの主題について論じる者に対して、そのまま認めてやり許してやるべきだとばかりは思う。そして、この種の事柄に関するかぎり、ほめるとすればその着想ではなくて、その構成でなければならぬ。必要不可欠なこと以外の、考え出すのに困難な内容の事柄になってはじめて議論の構成のほかに、さらに着想もまたほめるべきなのだ。」^Ⅰソークラテースは、エロースの愛を抱いている人間は病める欲望の虜であるというリュシアスの基本前提はそのままに、かかる基本前提のもとに主張される、戀していない者のほうに身を委

せるべきだという趣旨の説得的議論に構成上の技術的配慮を加え、語ることに関わる技術性の問題に先ず、パイドロスが目醒めるようにと誘導する。簡単な図式化を許すなら、内容・構成ともに劣悪なリュシアスの演説に共感を抱くパイドロスの心を、エロースがこの上なき神の賜物であることを哲学的に証明する内容・構成ともに満足すべきソークラテースの演説の大きな展開を介して、フィロソフィアへ転換誘導する一布石として、内容には目をつむって構成を技術的・学問的に改善した演説の可能性をエイローネアをこめてパイドロスに暗示する。この演説はリュシアスの演説の着想はそのままに構成を改善し、ディアレクティケーの一端を垣間見せることによってリュシアスのエロース観の偏狭さを露わにし、以てパイドロスを矯正しようとする教育的効果はもつもの、語られる内容はソークラテースの意に染むものではない。

若き友パイドロスを相手とするソークラテースの対話は、ソピステースを相手とする場合の争論的対話とは異なっており、心を許した同志のゆとりある対話である。そこには論駁の精神ではなく遊び心が探究の精神と共に漂っている。リュシアスの演説を種に即興演説を試みたいというパイドロスの希望を拒わって、リュシアスの演説そのものをパイドロスに朗読させたソークラテースは、ここに至ってパイドロスを逆手をとられ、リュシアスよりも豊かな演説をしなければ対話を止めると、戯れつつも言葉巧みに脅かされる。フィロロゴス(愛言者)のソークラテースは対話の途絶を何よりも恐れて、¹⁵ 以上のような布石をうった上で第一の演説を披露する。そして彼はこの演説が自ら棄出したものではなくムーサイの靈感を仰いだものであること、及び演説の語り手を架空の口の上しい口説き手に仮託し第三人称で語ること、従ってその語り口が矛盾してその話が帰するところ嘘¹⁶であることを嗅わせ、間接的に語り手に対する秘かな倫理的忠告とすること、以上の三点を予防線とすることによって、自分と自ら語る演説の間の距離を距てつつ、心ならずも演説を語りだす。「では、ムウサの神たちよ、どうかお導きください。おんみらが調べ¹⁷高いムウサと呼ばれているのはその歌の性のゆえであろうとも、あるい

は音楽好きのリギュス族の名のゆかりでこの名を得たのであろうとも。——『いざや来りて、わが物語るをたすけたまえ。』これなる世にもすぐれたるおのこ(「パイドロス」)は、彼がすでに前から賢しと思うその友(「リュシアス」)の才知を、いま、ますます際立たせようとして、むりやり私にこの物語をかたらせるのです。

むかしむかしあるところに、たいへん美しいひとりの子供というよりも若者がいました。この若者には、たくさんのおたくさんの求愛者がありました。その中にひとり、口の上手なのがいて、ほんとうは誰にも負けないくらい、その子を戀しているくせに、自分は戀していないのだと、その子に信じこませておいたのです。そしてある日のこと、彼に言い寄るのに、ひとは自分を戀している者よりも、戀していない者に身を委せなければいけないのだという、まさにこのことを彼に説得しようとして、次のように語ったのでした。¹⁷

しかし、言論の技術性にパイドロスを目醒めさせるという発話上の目的と、実際に語られていることが本来忌むべき内容であるという通告に基いて定義し、それを踏まえてエロースのもたらす害悪を修辭学の教科書風に整然と説き進めてきたソークラテースは、議論が頂点を迎えてエロースが魂の養育にとってこの上なき害をもたらしと放言するに至ったところ、演説の構成上半ばのところまで語ることをやめてしまい、対話と演説が行なわれていた場を忽然と去ろうとする。

c 内的予言の第一契機としての予感

ソークラテースは何故その場を立ち去ろうとしたのか。それは彼が語っている最中、或る咎めの予感に苛まれていたからである。「げんにぼくは、あの話語りながらも、ずっと前から、なんとなく胸さわがしていた。イビュコスという言葉を借りて言う」と、『われ神々の前に罪人となりて、人の世の誉れを購いたるにあらずや』と、

なにかしら気が気ではなかった。」⁽¹⁹⁾

ダイモーンは、バイドロスに対する教育的効果の故に、ソークラテースに対して語ることを裁可していたが、本来ダイモーンは、エロースを人間の欲望として位置づけるこの話はフィロソフィアの化身であるエロースの價値を貶めるものであり、忌避すべき話であると観じていた。従ってダイモーンは、語るソークラテースの魂に干渉を加えてソークラテースの心に罪の予感を覚えさせ、それによってソークラテースは自ら語りながらしかし語られるべきロゴスが語られていないというアポリア（行き詰まり）の状態で動揺していたのである。リュシアスが語った意味におけるエロースは、ソークラテースが本来考えているエロースの姿ではない。ソークラテースは内心でこのアポリアを晴らさなければならぬと念じつつ語り続けていたが、エロースの愛をもち、従って理性を失っている者は魂の養育にとって最も有害であると、魂の真相（アレーティア）について顛倒した形で言及するところで第一の演説を放棄してしまう。動揺するソークラテースの心に生まれた本来的存在への恥の念が頂点に達し、彼をおしとどめてしまったのである。

d 内的予言の第二・第三契機としてのダイモーンの合図とその解釈

ダイモーンのお告げは、話を中断し立ち去ろうとしたソークラテースに「立ち止まる」ように命ずる。それはソークラテースが未完成のまま話を放棄したからではなく、自ら語った汚れた話を神聖な場所にそのまま放置して立ち去ろうとしたからである。これまで沈黙の内にソークラテースの行爲を裁可していたダイモーンは、ソークラテースが立ち去ろうとした時に積極的に介入し、「立ち去るな」と命じた。「ぼくがまさに川をわたって向うへ行こうとした時にね、君、ダイモーン、即ち、いつもぼくをおとずれるあの合図があらわれたのだ。——それはいつでも、何かしようとする時にぼくをひきとめるのだが。——そして、そこからある聲が聞えて、ぼくが

神に対して何か罪を犯しているから、自らその罪を浄めるまでは、ここをたちさることはならぬと、こうぼくに命じたように思えた。²⁰⁾

靈感は人間の魂の内で神に向かって開かれた部分であるヌースに位置する内的聴覚に否定命令として注ぎ込まれる。その限りではソークラテースが今為そうとしていたことを止めるようにという消極的指示を与えるに過ぎない。ダイモンは立ち去ろうとしたソークラテースにただ「立ち去ってはならない」と命じたのみである。しかし、ソークラテースはそこから、これまで自分が神的存在に対して誤ちを犯していたこと、それゆえ、これから誤ちの浄めを行わなければならないことを悟っている。ソークラテースに禁止命令を発するダイモンの合図が臨んだ (*éreveto*) のは事実だが、禁止する理由を述べる聲は彼が聞いたように思った (*éodea ákroónai*) に過ぎない。²¹⁾ 否定命令から行為の指針を積極的にとりだすためには解釈が必要である。ここには情報としては内容の薄い禁止命令であるダイモンの合図に対するソークラテースの解釈が既に入っている。自己に臨んだ起業者が与えた命令が何を意味しているかソークラテースには理解することができた。神意を伺うことよって人が過去に何をなし、将来にどのような運命に遭遇するかを告知する点においてソークラテースは一種の巫者であるが、彼も自覚するように職業的予言者とは性格を異にする。「ところで、ぼくは巫者なのだ。あまり有能ではないがね。しかしちようど字の下手な人たちと同じで、ただ自分だけのためなら、けっこう間に合うのだ。だから、ぼくはもう、どんな罪を犯したのかはつきりわかっている。」²²⁾

では職業的予言者と素人の「予言者」とはどこが異なるとソークラテースは自覚しているか。神意の告知を受ける点では両者は共通しているが、ソークラテースがかかる神意を命令として自ら受け入れ、それに自ら従う者であるのに対し (参照、「ちようど字の下手な人たちと同じで、ただ自分のためなら、けっこう間に合うのだ」)²³⁾ 職業的予言者は命令を自ら発する者でもなければ、命令に従う者でもない、単なる命令の中間媒介者である。職

業的予言者は生起するであらうことの徴を他人に伝達することはできても、伝達する内容をそれとして認識することはできない。それは彼が何のために命令が発せられたかという目的を自覚することなしに、他人の発した命令を伝達する取り次ぎ人にすぎないからである。従つて媒介者の内では命令が命令として充實することがない。それに対して巫者としてのソークラテースはダイモーンの合図が臨むと同時にその解釈を行ない、「この場を立ち去るな」というダイモーンの命令から、自分が神に対して罪を犯していたことを自覚している。ソークラテースが自ら合図を受け、かつそれを解釈することができるのは、命令が何のために発せられたかという原因と目的を認識するための目的構造を自覚しているからである。彼は第一の演説をしている間、神々に対する咎めから心安らわれない不安な思いかられていた。この思いを晴らすためにはどうしたらよいかというアポリアからの脱出の願いが、命令を命令として自覚させる目的として機能している。この目的構造を自覚している精神の内に否定命令が置かれた時、「立ち去つてはならない」という命令は、「犯した罪を償うために立ち去つてはならない」という形に直ちに充實する。靈感の注入と解釈は、²⁴ 酢を注がれた牛乳が直ちに凝固するように相即した形態をとる。その意味では、田中美知太郎の指摘するとおり、ダイモーンの合図の解釈という予言の仕事は既に咎めの予感から始まっている。このようにソークラテースの内的予言は、ダイモーンの合図が臨む前の予感と、ダイモーンの合図の臨在と、ダイモーンの否定命令の解釈という三つの契機から成立している。神的存在に対して開かれていた醒めたヌースを場に生起する神意の解釈とそれを可能にする予感の契機において、ソークラテースは職業的予言者と異なる。このダイモーンのお告げが臨む前に、魂の動揺の内に形象的に予感として把握されていた事態を、自らに注がれた神意の解釈によって知識として知る仕事を、ソークラテースは内的予言（マンティケイ）と呼ぶ。²⁵

四 内的予言の機能

ダイモーンが内的に告げた否定命令の意味を解釈によって知ることは、魂が神意に即することであり、それゆえ、お告げを介してソークラテースの魂が瞬間的に本然の姿へと立ち返っていることを意味する。かかる本然への立ち返りはソークラテースのみに限られるわけではない。かかる立ち返りを可能にする内的予言の座は、ソークラテースの存在を介して特殊な職業の巫者から類的な魂一般へと転換される。「じっさい、友よ、およそ魂というものは、一種の予言の力をもっている。」²⁶この魂の本然への立ち返りを介して、『パイドロス』篇の魂（プシューケー）観は前後で一變する。ソークラテースの第一の話、そしてリュシアスの話では魂の真相（アレテーイア）が覆われたまま話が進んだ。彼らの話には魂というものを語る視点が全く欠落している。そしてソークラテースの第一の演説は、エロースが魂の養育にとって最大の害悪をもたらすという否定的顛倒的言及がなされた直後で正確に終わっている。「もともと、戀にとらえられ、その力に強いられて理性を見失っている人間には、けつして身を委せるべきではなく、戀をせず理性を保っている人を選ぶのが、はるかによいのだ。——さもないれば、……魂の教養の点に至っては、この上なく重大な害毒をうけるのは必定である。そしてこの魂の教養こそは、人間にとつても、神々にとつても、まことにこれにまさる尊いものではなく、今後も永久にありえないものなのである。

されば、いとしき子よ、君はこういったことを、心に留めておかなければならない。そして戀する者の愛情とは、けつしてまごころからのものではなく、ただ飽くなき欲望を満足させるために、相手をその餌食とみなして愛するのだということを、知らなければならぬ。うまし子を戀うる者の思いは、狼の仔羊を愛するに似たり。²⁷これに対し第二の演説は魂の真相を明らかにすることから説き起こされ、エロースは理性を失った病んだ状態と

は正反対に、神から与えられた狂気の最も卓れた形態であるフィロソフィアの化身であると規定される。ダイモンのお告げ、ダイモンによって注ぎ込まれた靈感は、第一の演説に語られた禍のエロースと第二の演説に語られる至福のエロースを総括する類的なエロースを発見する起縁となっている。ダイモンのお告げによって、ソークラテースは部分に偏した位置から全体を総覧する地平に身を置き直している。或る配慮の下にソークラテースに対し、意に染まぬ演説を語ることを裁可していたダイモンは、ソークラテースに勧告して哲学的実存の化身としてエロースの真相を語るように要求する。そしてソークラテースは、この第二の演説を先立つ演説を浄化するものとして語りだしてゆく。

註

- ① この部分のギリシア語テキストに対する逐語的註解は、「プラトーン『バイドロス』*222b8-e2* に対する註解」(東京大学文学部美学藝術学研究紀要・五、一九八六年所収)として既に公にした。本稿はこの註解における実証に基いている。
- ② バイドロス篇のテキストとしては、一応 J. Burnet 編 *Platonis Opera vol. II*, Oxford, 1901 を用いる。註解を試みる部分の邦訳は、藤澤令夫著、プラトーン『バイドロス』註解、岩波書店、一九八四年に所収の訳文を参照しつつ、論者自ら試みた訳である。
- ③ *o theos* と *to theon* が同義であり、いずれも「神」を意味するのと類比的に、*o daimon* と *to daimonion* の関係を受けとるべきであるとする加藤信朗教授の主張(加藤信朗著『初期プラトーン哲学』、東京大学出版会、一九八八年、二三七頁)に従って、限文のト・ダイモニオンを「ダイモン」の意味で理解し邦訳する。
- ④ 否定命令のソークラテースによる解釈にはエイローネイアは含まれていないと考え、テキストの *eis en* (プロクロス・バーネット) は B T 写本どおり *eis* と読む。前掲拙稿五十五頁参照。
- ⑤ 参照、山田晶『ソリロクイア』における《ラチオ》の意味について、『中世思想研究』、二十七号、一九八五年、十一頁。

- ⑥ *Ap.* 31c-d。訳文は藤澤令夫、前掲書一五五頁に引用のものによる。
- ⑦ *cf.*, R. Hackforth, *Plato's Phaedrus*, Cambridge, 1952, p. 55.
- ⑧ *cf.*, H. L. Sinaiko, *Love, Knowledge and Discourse in Plato*, Chicago, 1965, p. 27.
- ⑨ *cf.*, R. Hackforth, *op. cit.*, p. 31.
- ⑩ *Phdr.* 234e1-4.
- ⑪ *Phdr.* 235e2-236a6.
- ⑫ *cf.*, H. L. Siraiko, *op. cit.*, p. 38.
- ⑬ バイドロスはソクラテースの第一の演説が終わった時に、効果として説得を生むべく演説に導入されたしかるべき構成の存在には気づいてゐるが (*Phdr.* 241d4-7)、『彼の関心は未だ弁論術のレベルにとどまらざる (*Phdr.* 243d8-e1)』。
- ⑭ *cf.*, G. R. F. Ferrari, *Listening to the Cicadas: A Study of Plato's Phaedrus*, Cambridge, 1987, pp. 108-109.
- ⑮ *cf.*, G. R. F. Ferrari, *op. cit.*, p. 105.
- ⑯ *cf.*, H. L. Sinaiko, *op. cit.*, p. 31.
- ⑰ *Phdr.* 237a7-b6.
- ⑱ *cf.*, C. L. Griswold, Jr., *Self-Knowledge in Plato's Phaedrus*, New Haven and London, 1986, p. 69.
- ⑲ *Phdr.* 242c7-d2.
- ⑳ *Phdr.* 242b8-c3.
- ㉑ 参照 田中美知太郎、『ソクラテース』、岩波書店、一九五七年、九十二頁。
- ㉒ *Phdr.* 242c3-6.
- ㉓ *Plt.* 260d6-8.
- ㉔ 参照 田中美知太郎、前掲書、九十三頁。
- ㉕ 筆者の考えでは、プラトーンのいわゆる「シユトス」とは、醒めたヌースを場に生起する注入された神意の解釈といふこの内的予言の組織的かつ大規模な展開である。

- (26) Paddr. 242C6-7.
- (27) Paddr. 241B6-d1.